

---

# 奏音-kanon-

紅蘭リト

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

奏音 -kanon-

### 【Zコード】

Z0457F

### 【作者名】

紅蘭リト

### 【あらすじ】

天才とは私は違う。だけど、負けない事がある。由宇夜【ユウヤ】は唄う事が好きな少女。叶多【カナタ】は天才的なピアノを弾く。二人の音楽は今一つとなる。

小さな港町。

誰も通らないような場所で、あいつと音を奏でてる。

それが、当たり前になつて居るのがなんだか悔しくて、歯痒かった。

何度も夢見た。

大きな舞台で歌を唄つ。

沢山の歓声に包まれ、拍手がなりやまない。

そんな夢を。でも、現実はそんなに甘くは無くて、裏切られた。

悔しくて泣いた夜。

叫びちらした。

もう、唄ひのを辞めよつと思つた。

「ふざけんな。根性なし。」

あいつは私にそう言い放つた。

普通は励ますものでしょ。でも、あいつひじくて、笑みが溢れた。

「ゆう～や～？」

「え？」

いきなり話しかけられて心臓が飛び上がった。

「練習…しねえの？」

「するよ…考え方してただけ。」

あいつ…叶多はピアノの鍵盤をおした。

「今日の晩御飯は何かなあ～、つてか？」

「それは叶多でしょ。」

叶多は苦笑しながらアタリと囁つた。

「ねえ、叶多はピアノを辞めよつとは思わないの?」「は?」

叶多は驚いた顔をして、『別れの曲』を弾きはじめた。やつぱり叶多は上手い。

纖細で優雅ながらも、大胆で正確で…  
天才と言つ言葉がぴったりな演奏。

「俺はや、ピアノを弾くの好き。時には嫌になるけど、思い通りに演奏出来ると嬉しいし。」

叶多と私は違う。

同じ音楽が好きでも、私は叶多みたいに純粹に唄う事はできないよ。  
「いわゆる、中毒みたいに弾くのをやめられなくなる。お前もそ  
なんじやねえ?」

『中毒』

確かにそつなのかも知れない。なにかに取り付かれたよつに唄つ。  
だけどね、私は唄うのが好きなはずなのに唄うのが辛いんだ。

「私、帰る。」

「はー?由宇夜!なんで。」

「用事なの。」

さつさとカバンを持つて、スタジオこと、音楽室を出た。

居たたまれない。

叶多と会わせるのは好き。でも、比べられるよつに見られるのが嫌  
い。

わがまま、びつしきもない私を叶多は見てくれる。私は叶多に  
甘えてちや駄目だ。

港を通り。

此所で初めて叶多と会つた。

聴いた事もないメロディーを唄う変な人だった。

次に会つたのは音楽室。

別のクラスの転校生だった叶多は、やつぱりプロ並のピアノを弾いていた。

それに合わせ、私は唄つた。

曲が終わると叶多は私に笑いかけた。

「いい声してるな。唄うの好き?名前は?」

それから私たちは音楽室で、叶多のピアノに合わせて演奏したね。

「ゆうや、カナタ君が呼んでるよ!」

叶多はドアにもたれるように立っていた。

「叶多。」私が呼ぶと満面の笑みを浮かべた。

「すげえ良い曲作れた!」

半ば強制的に叶多に連れられ音楽室に…

放課後だから良いものの…

叶多は切ないメロディーを奏で始めた。

私は心臓が跳ね上がるのが分かった。

この曲を聴くのが辛い。

図星を指される感じ。

「やめて!」

叶多はびっくりして弾くのを止めた。

「どうした?良い曲だろ?『ゆうや』」

やつぱり。

私の曲なんだ。

「唄えよ。」

「唄えない。」

私はこの曲みたいに綺麗じゃない。

何もしらないくせに、私の曲を作らないで。

私を分かろうとしないくせに。

「なんで。唄えって。」

「私はツ！叶多とは違う…」

「何が！何が違うんだよ…？」

叶多は私とは違うよね。

私は汚いもんね。

「叶多は才能があつて良いよ！唄うも唄わないも私の勝手でしょ！  
叶多のために唄ってくれる人いっぱい居るでしょ？」

「俺は由宇夜が良い。」

私は汚いもんね。

「綺麗事言わないで。そんなに唄つてほしいならコンクールにでれば！？コンクールに出たら注目されて、私なんて忘れるくらい忙しくなるよ。絶対。」

「…分かった。」

「こんな事言つつもりなかつたのに。」

今からでも、認めんって言えば…

私に唄つてほしつて言つてくれて嬉しかつた。

それから何時も聞こえていた叶多のピアノが聞こえなくなつた。  
ねえ、叶多。

私の歌は貴方に少しでも幸せを与えられましたか？

私は貴方の奏てる音楽に、時には追い詰められ、  
時には救われたよ。

家で歌詞を書こうと、歌詞ノートを開いた。

一ページ目には慣れない歌詞が書いてある。

ページが増えるにつれ、私の書く詞は上達していた。私でも、少し  
は変わっていた。

私は少し安心した。

ノートの半分くらいから詞は書いていない。

でも、最後のページにはぎつしりと詞が書いてあった。

題名は『奏音&amp;歌音』

この曲は…

私は知らず知らずにこの歌を唄っていた。

【小さな不安は夢に埋もれた。優しい貴方の言葉に溺れて行つた。  
もう大丈夫だよ。貴方は音を奏でて。私は声が枯れるまで唄い続けるから。】

私の誕生日に名前もないこの曲を叶多は弾いた。  
静かで美しくて、

私は一度聞いたときからこの曲が大好きになつた。

「ね、名前付けないの？」

叶多は小さく笑つた。

「名前は…奏音。音を奏でて、周りの奴等を幸せに。つて  
「イメージに合わないよ！なんか奏音って叶多みたい。」  
「良い名前だろ？俺にもお前にもぴつたりだし。」

叶多は嬉しそうに笑つた。

「私は奏音より歌音だよ。奏でられないし、歌で音を出す。  
「んじや、奏音&amp;歌音で良くな？叶多&amp;由宇夜つて意味で。」  
「私達のテーマソング？」

【私達は苦しい思い出をノートに閉じ込める。だから前に向ひ。辛い事は誰にも話す事は出来ないから。音楽にのせて、理想を生み出すんだ。】

私の理想は…

「由宇夜、俺再来週の土曜日、コンクールに出るから。良かつたら見に来て。俺はお前とは確かに違うかも知れない。でも、音楽が好きだから。」

「…本当にコンクールに出るの?私の言ひ方となんて気にならないで。」

「お前と会つ前はずっと練習してコンクールに出ての繰り返しだったし、前までの生活に戻るだけ。」

叶多は哀しそうに笑っていた。

コンクール会場に私は走った。

出場者はやつぱつと手立て、魅了された。

叶多は真顔で舞台上に上がった。叶多は教本通りの演奏をした。

違つ。

これは叶多の音じゃない。ただの「ペー。私の好きな叶多の音じゃない。

審査員は叶多の音を聞くと目をつぶり聞き入った。

「凄い、上手いな。」

確かに上手い。

でも、叶多、違うでしょ？

叶多は急に弾くのを止めた。次の瞬間、指定された曲じゃない曲を弾き始めた。

『奏音 & a m p; 歌音』

叶多は叶多の音を奏で始めた。気持ちのいいもった、叶多だけの音楽を…

一人の審査員が叶多を止めようとしたが、他の審査員がそれを止めた。

皆が叶多の音楽を聞き入る。演奏が終わると大きな歓声が叶多を包んだ。

「叶多！何してるの！あの曲演奏して。」「由宇夜、来てたんだ…。だつてさ、途中で俺の音じゃない！つて思つてさ、俺の音は…って考えたらあの曲が浮かんだんだよなあ。結果。見に行くぞ。」

やつぱり叶多は最下位で。叶多もそりやそりだと笑つた。

「初めのまま弾いてたら一位だったのに。」

叶多は私の頭をポンポンと叩いた。

「ねえ、叶多。私、音楽が好きだよ。叶多みたいに才能ないし、やっぱり叶多とは違つ。でも、叶多が私で良いって言ってくれるなら私は唄いたい。」

「よく言えました～。」

「私は『ゆうや』ほど綺麗な人間じゃない。けど、イメージに合つ

よつなゆつやになる。」

「『ゆつや』は由宇夜じゃない。でも、由宇夜が俺を越える、『ゆつや』に会ひ由宇夜になるなら協力してやる。」

音楽は幸せを運ぶ。

私は辛くて歌を辞めようと何度もも思った。  
でも、惹き付けられる。  
だつて好きだから。

ちょっと俺様で、

能天気な叶多のピアノが私は好き。

愛しい音楽を

愛しい歌を

愛しいあの音を

現実は厳しいけれど

音楽を奏でよう。

それは、私の在り方、存在理由だから。

【小さな小鳥は大空へ飛び立つ。綺麗な声でないで。綺麗な声で音を奏でて。私が傍にいるから。】

(後書き)

音楽は時には心を落ち着かせます。そんな音楽を奏でる一人は輝いていると思います。この小説を呼んで頂いて有り難うございます。どうだつたでしょうか？

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0457f/>

---

奏音-kanon-

2010年10月20日13時58分発行